解説

青年団活動が育てる地域づくりの担い手

北海道大学大学院
大坂祐二

消防団・暴力団・青年団

「青年団って何するんですか」
「消防団って知ってる？」
「ええ、まあ」
「じゃあ暴力団は？」
「知ってます」
「青年団もそんなようなものだよ」

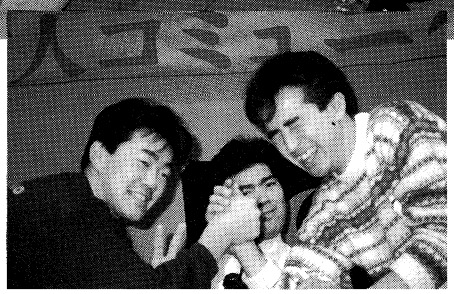
ある時、社会教育を学んでいる大学生と某県青年団長との間でこんなやりとりがあったのを聞いたことがある。消防団はともかく暴力団と比べるなんて、と思われる方もいるだろう。比較がふさわしいかどうかはともかく、多くの若者にとって青年団は、消防団や暴力団と同様、必ずしも身近なものではない。

例えば、雑誌『ザ・青年』が行った、全国九県二十二青年団の新入団員四十三人を対象にしたアンケートの結果を見てみよう。入団前の青年団の印象について、「祭り好き」（三三％）、「一生懸命」（二八％）といった回答に混じって、「ダサイ」「古い」（各一六％）、「とっつきにくい」「入りにくい」（各一二％）という声があげられている。青年団は若者たちにとって、ダサくてとっつきにくいものなのだ。

しかし青年団はまた、消防団のように地域になくてはならない存在であり、暴力団のように（？）密な人間関係によって成り立っている（その意味では暴力団と言うよりヤクザと言ったほうがいいかも知れないが、いずれにしろ暴力団やヤクザを肯定している訳ではないことはもちろんである）。

北海道青年団体協議会と北海道青年団研究所が行った道内二十市町村、四百三十一人の青年団員を対象にしたアンケート調査の結果、「青年団活動を通して得たこと」で多かったのは、「友人や仲間が得られる」（七四％）、「他の人と共同で活動する喜びを味わえる」（三一％）、「世間や社会のいろいろなことがわかり目がひらかれる」（二三％）などだった（複数回答）。また「青年団に期待する活動」でも、半数以上が「同世代との仲間づくり活動」をあげたほか、三割が「地域発展のための提言や活動」を望んでいる。始めは青年団をダサくてとっつきにくいと思っていた若者も、青年団のさ

▲訓子府町青年団体連絡協議会の仲間とともに



仲よく腕相撲

まざまな活動を経験するなかで、次第に仲間づくりや地域づくりに目を向けるようになっていることがわかる。

訓子府町青年団と農村青年の仲間づくり

訓子府町は北海道網走支庁管内の内陸部にあり、人口およそ七千二百人、世帯数二千足らずの農業の町である。訓子府川・常呂川流域の平野とゆるやかな高台に、およそ五百七十戸の農家が小麦、馬鈴薯、玉ねぎ、メロンなどの畑作や酪農を営んでいる。就業者のおよそ四五％が農業に従事しているが、働いている青年層（十五～二十九歳）の大半は町内や隣の北見市のサービス業などに勤めており、農業青年は三割ほどである。

訓子府町青年団体連絡協議会（以下、訓青協と略）は、一九九〇年度で会員数八十一人（うち女性二十四名）と、近隣の町村の中では大きな青年団だ。日本青年団協議会の機関紙で何度か紹介されたこともある。会員の職業を見ると農業（実習生を含む）が四十七人、公務員や保母・教員が十六人、農協職員が九人などとなっており、農業青年が半数を占めている。

（なおここでの訓子府町に関する記述は、主に一九九一年までの調査・取材によるものであることをお断りしておく）

先の道内青年団員アンケートの回答者も農業青年がほぼ半数を占めている。道内でも地域によって差はあるものの、会社員や公務員など勤めの青年が大半である府県の青年団と比べると、農業青年、それも専業の青年が多いことは北海道の青年団の特徴と言える。

こうした地域では、青年団に集まる仲間が幼なじみであったりすることはよくあることで、この点では都市部で青年の仲間づくりを進めようとする場合と条件は異なっているはずだ。「生いたち学習」

「たまり場学習」などと呼ばれ、青年団や青年サークルの間で広く知られている学習方法がある。これはかつて金の卵と呼ばれ、九州・東海・東北・北海道をはじめ各地から集団就職で愛知・名古屋にやってきた青年たちの、サークル活動の中から生まれた。いいようのない劣等感や孤独感を抱え「自閉」する青年たちが、自らの生いたちや生活をつづり、語り合う。心の傷を個人の問題としてだけでなく、自分たちが育った社会や教育、政治の問題とも関連させ、学びあうというものだ。したがって、隣の家の財布の中味までわかっているような農村では、こうした学習はなじまないという見方もある。

訓青協のイベント、ハマリンピック

しかし実際のところ、特にここ数年はどうも様子が違ってきているようだ。例えば、高校卒業後、大学の専修科で二年間学び、さらにアメリカで一年間の農業研修を経験して町に戻り、一九八八年度に訓青協に入ったHくんは、入団当時をこんなふうに語る。

「一年目は結構くすぶっていた。友だちもバラバラになってあんまり知っている人もいない。さあどうしようと思って、青年団も必要なときしか行かないでだいたい家にいたから、テレビを見たりぼーっとして。こういう毎日が続くのかなと思って、結構悩んでいたときもあったけど、それでも青年団に入っていたから、ちょっとしたきっかけで話し相手が出来たから、それでだいぶ救われた。」

また、札幌の女子短大を卒業後、農家である「我が家に就職してしまった」というOさんは、入団一年目の文集に次のように書いている。

「それまで鉛筆しか持っていなかった手に二〇kgの肥料袋、お白粉の代わりに顔には黒い土埃。農作業という講義を終え帰宅する頃には心身共にクタクタ…」

「地元に戻ってきたものの、畑と家の往復で友達も少なく、これといった楽しみもなく、平平凡凡な日々……。何か違う、刺激がないじゃないっ、こんなのイヤダっ!!

そぉーだっ〝青年団〟入ってみよォーっと」

農業青年が多いと言うことは、近隣に働き口が少なく、農家を継ぐか町を離れるしかないということの裏返しでもある。訓子府は町内に食品加工や農業関連の工場などもあり、北見市にも片道二、三十分もあれば通えるのでまだいい方だが、札幌などに就職する者がいれば、地元に残る友だちはぐっと少なくなってしまう。たとえ町から離れなくても、仕事の忙しさにかまけて畑と家、職場と家の往復をくりかえしていれば、「何か違う、こんなのイヤダっ!!」という思いが頭をもたげても不思議ではない。農村に働き暮らす青年たちにとって「仲間づくり」は、こんな思いを見え隠れさせながら進められている。

イベントの効用

今ほど過疎化・高齢化が進んでおらず、青年層が文字どおり地域の生産や文化の担い手であった頃に青年団活動を経験した「もと青

商工会、青年部や各種サークルにも呼びかけ「祭典」「運動会」が催された。

年」から見れば、今の青年たちは遊んでばかりいるように見えるのだろう。そんな大人たちの批判に対して訓青協は、「もっと町民に青年の活動を知ってもらおう」と、一九七九年度から「冬の祭典」に取り組んだ。

商工会青年部や各種サークルにも呼びかけ、協賛を得て開催された「祭典」では、青年たちの手作りの雪像が披露され、甘酒がふるまわれ、子ども運動会などが催された。評判を呼び町民の間に定着しつつあった冬の祭典は、「観光資源」として町に取り上げられ、八二年二月の第三回から町の行事として開かれることが決まった。ちょうど町がいわゆる「新過疎法」の指定地域になった頃のことだった。

自分たちのやってきたことが認められ、町ぐるみの行事にまでなった。その意味では喜ぶべき「昇格」だった。行事が大きくなって金銭的な負担も大きかったし、万一事故が起きた時の責任をどうするかという問題もあった。だが、今度は主催者ではなく、実行委員会の一メンバーだ。自分たちの発想で自由にやっていたものが、金を出してもらうとなるとそうもいかなくなる。だんだん「自分たちの祭り」ではなくなっていくような気がする…。

町ぐるみの祭りにどう取り組むか議論していた訓青協に降ってわいてきたのは、祭りの実行委員会の中心になっている町産業観光振興協議会への加入要請だった。総会などで議論した末、青年たちはこんな結論を出した。それは、振興協議会は「青年団の活動とは基本的に異なる点が多く」、自分たちは「損得ではなく、町民の方々との理解・交流を深める意味で」各行事に参加する、というものだった。祭りの取り組みの過程で青年たちは、町や振興協議会、そこに参加している人々がどんな立場で祭りに取り組もうとしているか、見極めようとしていたのだろう。その結果が、組織の利益のためではなく、同じ町に住むものどうしの「理解・交流を深めたい」という答えなのだ。

イベントの成果は経済だけで計れるものではないと思う。地域には様々な立場や考えの人たちがいる。その様々な人たちが立場の違いを超え、この町で暮らしていきたいという思いで一つのことに取り組むとき、イベントは成功する。青年たちはそんなことを学んでいったのかも知れない。八七年に発行された道内の青年団が取り組むイベントを紹介した資料に、訓青協はこんな言葉を添えている。

「雪の少ない地域にとって雪像とは、決して仕上がった結果ではなく、みんなで協力して作製する過程において意義がある。」「(祭りは)決して『観光』ではない!!」

地域の人々と学びあい　支えあいながら

青年たちがイベントの取り組みから学んだものは、青年団活動が地域の人々と関わって行くときの、ひとつの目標であり理想であったと言えるだろう。しかし、毎年会員が入れ代わり、全体としては減少しているなかで、目標をくりかえし確かめ合うことがなければ理想を持ち続けることはむずかしい。行事をこなすだけで精いっぱい、取り組みの過程や内容には気が回らない、ということもしばしば起こる。なにより「町民どうしの交流のため」と言っても、「まず自分たちが楽しくなくては」というのが青年たちのホンネのところだ。そこで訓青協は、一九八七年度から行事の運営を役員中心から実行委員会中心に切り換え、会員一人ひとりの意見や要求を取り入れた活動を目指した。

その頃、訓青協会長あてに一通の手紙が届いた。送り主は「たんぽぽ親の会」、訓子府の障害児を持つ親の会で、障害者の問題を健常者と共に楽しみながら考える場として「たんぽぽコンサート」を開きたい、ついては訓青協の皆さんにも協力してほしい、という主旨だ。しかし、青年たちはすぐには動かなかった。「障害とか福祉とか言われてもわからない」と、学習・研修実行委員会が中心になり学習会を企画。親の会代表と町の保健婦を迎えて「身体障害者問題を通して自分の健康を考える」と題した学習会が開かれた。

このような学習会はこれまで経験がなく、参加者からは「こういう事も青年団でできるんだ」という声も聞かれた。また、やがて結婚し親になる青年たちにとって障害児の問題、いのちや健康の問題は身近なことと受け止められ、三カ月後には「望まない妊娠をしないために」と題して二回目の学習会も開かれた。「たんぽぽコンサート」は青年たちもチケット売りなどで協力し、大成功に終わった。

この年の活動が影響しているのだろうか、これ以降の訓青協の活動には「子どもたちのために」「お年寄りのために」といったものが目立っている。例えば函館在住の嘶家を呼んで寄席を開いたときには、会員の親やおじいちゃん、おばあちゃんをたくさん呼んできた。猿回しの一座の公演に取り組んだときには、親子券を出して小さな子どもを持つお父さんお母さんに声をかけた。最近では青年たちが弁論や演劇などを発表し競い合う青年祭で、子どもたちをはじめ町民も参加しての紙飛行機大会が催されている。

ひとくちに「町民との理解・交流を深める」と言っても、町には様々な年齢・職業の人々がそれぞれの暮らしを抱えて住んでいる。イベントがそうした違いを超えて

北海道青年祭に出席、道内の青年団と交流

共通の土台に立つことで成り立つものとするなら、障害者や子ども、お年寄りといった人たちと関わろうとする訓青協の活動は、様々な人々のそれぞれの立場や生活を理解しようとするものと見ることができるだろう。もちろん、当の青年たちはそんなことは意識していないかもしれない。それに本当に相互の理解を深めようとするなら、生活の実態やそこでの問題、背景となっている地域の課題など、学ぶべきことはまだまだたくさんあるはずだ。しかし、その手がかりは彼らの活動の中に、いくつもひそんでいるように思う。

青年団の〝まちづくり〟とは…

先に紹介したHくんは、公民館まつりで青年団の出し物として餅つきをやり、子ども連れの家族などに楽しんでもらったときに、その「楽しんだり笑ったりしている陰に僕らがいるって思えた」という。また、訓子府の町で暮らしてゆく見通しについて、こんなふうに語っている。

「訓子府で暮らしていくんだったら、人とのつながりがなかったらこんなところで暮らしていけないなって。人の中に入っていかなかったら自分も変わらないし、成長できないと思う。」

女性会員のお姉さん的存在で、現在は4Hクラブで安全な農産物・食品づくりに取り組んでいるというSさんは訓青協での経験についてこう振り返る。

「訓青協では保健婦さんとの出会いがあった。それに続いてたんぽぽの会。こういうことは絶対大事だと思う。…いろんな人に出会えてよかったと思うし、青年活動をやめてもそこで終わるのでなく、また違う出会いを求めて行きたい。…今は若い女の子たちだけだけど、若妻さんとか婦人部とかそういう人とつながりを持ちたい。」

こうして訓青協は、HくんやSさんのように様々な人たちとつながりを持ちながら、この町で暮らしていきたいと願う若者を、確実に地域に送り出している。二十歳そこそこの若者が、彼らだけで「町づくり」と大上段に構えてみても、たいしたことはできないかも知れない。しかし、訓青協で育ったリーダーは、町の様々な場面で活躍している。「たんぽぽ親の会」でも参加している親の多くは、かつての青年団のリーダーだという。青年団のOBたちが、農家の経営や地域の農業をこれからどうしていこう、子どもたちの育つ環境を豊かにしたい、そんな切実な課題をもったとき、彼らは訓子府のまちづくりを担う大きな力になるに違いない。

さて最後に、訓青協の青年たちがリーダーとして成長してゆくことを支え見守っている人たちのことに触れておかなければならないだろう。ご承知のように青年団は、社会教育関係団体として、教育委員会から物的な援助や指導・助言を受けることができる。訓青協は、青少年研修館という町の社会教育施設でありながら、青年たちが鍵を預かり管理している「たまり場」をもっている。多くの青年団が、仕事を終えて集まり仲間どうしじっくり語り合う場所がなく苦労しているなかで、こうした例は数少ない。くわしくは触れられないが、青年たちが「たまり場」を獲得するには、多くの困難もあったし社会教育職員との厳しい議論もあった。青年たちが町の施設の鍵を預かっているのも、そんな議論の積み重ねのうえに信頼関係があるためだろう。

また、「たんぽぽ親の会」と訓青協の出会いの背景には、社会教育職員と保健婦が連携した社会教育活動、保健活動の蓄積があることも見逃せない。訓子府では教育委員会・農協・普及所が連携した農業青年講座も開かれており、地域の大人たち、とりわけ地域の産業や住民の生活に関わる専門的な仕事に携わる人々が連携をとりながら、明日の地域の担い手が育ってゆくことを支えているのである。